
王宮で農業生活

佐倉風弦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王宮で農業生活

【Nコード】

N6950Z

【作者名】

佐倉風弦

【あらすじ】

農家の娘であるチャウランはある日、皇子に出くわし、チャウランの野菜を食べた彼は嫁に来ないかと言ってきた。母と父にお金たくさんもらえる攻撃を受け、送り出されたチャウランは王宮で農業生活することに。

野菜が一個

帝都から離れた辺境の地だった。

広大な空では青と白のグラデーションが繰り広げられており、その下には一面に緑色が目立つ畑の中央に土で作られた道。

大きな籠に大量のポココと呼ばれる紫色の丸い野菜を詰めてよろよと運ぶ少女の姿があった。

彼女は黄金色の髪を後ろで束ね、動きやすい白い服と黒いズボン、手には手袋を嵌めている。

重い籠を抱えた彼女は、後ろからカラカラという音を聞き取り、振り向いた。

この地には滅多に来ることのない馬車だった。

豪勢なデザインの黒い馬車であった。馬車には、この国 しゅうか 秀華 帝国の紋章が掘られていた。

それに気づいた少女は慌てて道を開ける。

帝国の紋章が掘られた馬車。それは、王宮の馬車だった。この馬車が使われるのは王族が移動をする時だけである。

少女の道の端で馬車が通り過ぎるのを待った。馬車は少女を通り越し、少し先で止まった。

少女は何事かと馬車に目を凝らした。

馬車が動かなくなっただのかもしれないし、気になるものを見つけたのかもしれない。

少し時間が立つと中から数人の兵士が出てきて、その後に一人の青年が出て来た。

雪のような白銀の髪に紅蓮の瞳。金の装飾が施された青い服。その姿を知らないはずはなかった。

何せ、彼はこの国の皇子だったのだから。

てつきり皇帝が乗っているものだと思っていた彼女は驚くしかなかった。

いや、皇帝も乗っているのかもしれないが。

皇子はこちらに目を向け、歩み寄って来る。

彼女は籠を持って後ずさる。

「君だ、そのの……籠を持ってる」

……もしかして、私何かしたかな？ 牢屋行き？ 死刑？

冷や汗をダラダラ流す少女の様子に気づいたのか王子は再度口を開いた。

「何か勘違いしてるようだが 俺がほしいのはその君の持つてる籠のなかの」

少女は籠のなかを確かめた。

籠に入っているのはポココだけである。

あえて説明するなら、このポココは少女が育てて不恰好ながらも何とか食べられる程度には育ったものである。

これ以外には何も入っていない。

少女は目を丸くしてポココと皇子を見比べ、恐る恐る口を開く。

「これですか……？」

「ん、その通り」

「ホントに……？」

黙って頷く皇子にポココを一つ、差し出した。

ポココを受け取った王子はポココにかじりついた。

もぐもぐと口を動かして、ぐくんと飲み込んだ。

生で食べちゃダメなのに……。ちゃんと加熱しないと腹壊しますよ？

口には出せなかった。

「シャキシヤキするな」

加熱してないんだから当たり前だろボケ

「しかし、うまい」

「これがですか……？」

何ですかこの皇子。すごくいい人じゃないですか

「これで収入はどれぐらいだ？ 満足に作れるぐらいの金はあるか？」

「あ、いや……収入もお金もあんまり……」

何が何だか分からないまま答えた。

「ところで、君の名前を聞こうか。俺は、知ってると思うが、シーゼン」

「私ですか。私は、チャウランです」

名前を聞かれたということは、もしかしたら野菜をまとめて買い取ってくれるのではないかとチャウランは期待に胸をふくらませた。シーゼンはチャウランから籠を受け取り、兵士に渡して馬車のなかに運ばせると彼女に向き直り、にっこりと笑顔を浮かべて次の言

葉を発した。

「では、嫁に来ないか？」

「はい、分かりましたー……え？」

チャウランは目を丸くした。

家に帰ったチャウランは母と父と木製のテーブルを囲んで話し合
いをしていた。

母と父はにこにこしていてやけに上機嫌だった。
チャウランは困ったような表情を浮かべていた。

「良かったじゃない。相手が皇子様なら玉の輿じゃない」

母の言い分に対してチャウランは難しい顔をした。

「私はまだ、十六歳だし……」

「結婚は十六歳からできるんだぞ」

父親の言葉にうつと言葉を詰まらせる。

どうにか回避しようとチャウランは何らかの言い訳を探さべく思

考を巡らせる。

そして次の攻撃。

「そもそも、今日初めて話した相手に愛なんて」

「結婚してからでも遅くはないさ」

父の遅くはない反撃。

チャウランは五十のダメージを受けた。残り精神ポイント五十。

「チャウラン」

母がお茶をすすめるのをやめ、チャウランに言葉をかける。

笑顔で弾んだ声を発する。

「あなたが皇子様と結婚したらお母さん達はお金がたくさんもらえ

……王子様と結婚したらあなたは幸せになれるわ」

「うぐ……」

母親のお金がたくさんもらえる攻撃。

チャウランは五十のダメージを受けた。残り精神ポイントゼロ。

チャウランは負けてしまった。

「大丈夫よ、お母さん達はずっとあなたのことを想ってるし、ちゃんと会いに行くから寂しいことなんて何も無いわ」

「うー……」

しかし、なぜ皇子が自分に嫁に来いと言ったのかチャウランには分からなかった。

数日後にチャウランは王宮に招かれた。

木製の赤い壁と恐らくそこまで高い必要性はないと思われる無駄に高い天井。

赤い絨毯が敷かれた廊下の両脇には金の装飾が施されたランプがあり、廊下を明るく照らしていた。

チャウランは兵士に案内されて王室に入った。

中央に配置された宝石の装飾が施された真つ赤な椅子に腰掛けていたのは豪勢な衣装を纏い、頭には純金の王冠を乗せた皇帝だった。立派な白い髭を生やした皇帝からは、威圧感を感じた。

チャウランはカチコチになりながら皇帝の言葉を待った。

「そなたが、チャウラン殿か？」

「は、はい、そうです……」

緊張しながらも何とか言葉を搾り出す。

「では、シーゼンのこと、頼むぞ」

「え？」

チャウランは思わず目を丸くした。

自分が平民であるからてっきり反対されるものだと思っていたのだ。

気になって皇帝に質問してみる。

「いいんですか？」

「いいとは？」

「だって私、平民じゃないですか……」

皇帝は笑った。

「ワシは差別などせん。それに」

「？」

「金髪の子って好みなんじゃもん」

「……………」

全力でこの場から逃げ出さなくなってしまったチャウランは堪えた。

「皇族は白髪ばかりじゃからのう」

白髪って皇族だからだったんだ……

「決してワシが老けているわけではない。証拠にシイゼンも白だっただろう？」

「そ、そうですね」

「さて、そろそろシイゼンの所へ行くといい。あまり独占してしまつてはシイゼンに嫉妬されてしまつからの」

「……………」

「では、リイラン！」

皇帝は脇に控えていた侍女に声をかける。
黄金色のふわふわした髪を腰あたりまで伸ばし、狐の耳と尻尾を生やした少女だった。

ただの侍女とは思えない程可愛らしい顔立ちをしていた。

金髪が好きだから侍女も金髪？

「チャウランをシーゼンの所まで案内せよ」

「承知致しました」

リイランは花のような笑顔を浮かべてぺこりと頭を下げた。

「では、チャウラン様。こちらへ」

リイランの後に続いてチャウランは王室を出た。

赤い絨毯の廊下を歩きながらリイランが口を開いた。

「チャウラン様、私はリイゼンと言います。よろしく申し上げますね」

「あ、はい」

「えーとですね、この城の地下に農場を用意したんですよ」「農場？」

「はい、農場です。普通に野菜を育てることが可能ですよ。今の時代、ストーンを使えば日光に当たらずとも野菜は育ちます」

ストーンというのは魔法の力が込められた魔法の石である。様々な力を持つストーンが存在し、様々な用途に使われている。

チャウランもストーンを使用して野菜作りをしている。

チャウランは水と土のストーンを使っている。

最近ようやく使い方が分かってきたというところだ。

「それで、皇子がチャウラン様に好きなだけ野菜を作るといいと」「王宮で野菜……」

しばらく歩き続けるとリイゼンがある部屋の前で足を止め、ドアをノックしてから開ける。

なかに足を踏み入れるとシーゼンの姿があった。

シーゼンは椅子に腰掛けて本を読んでいた。

「シーゼン様、チャウラン様をお連れ致しました」

「ん、その辺に置いていてくれ」

彼は本から視線を外すことなく言い放った。

私は物じゃないのに……

「では、チャウラン様。今日はもう遅いですし、お休みください」

ほわっとした笑顔を浮かべるリイゼンの言葉を聞いてチャウランは部屋のなかを見回した。

赤い机に椅子。

タンスにクローゼット。

白いふかふかの大きなベッドが一つ。

「あの……」

「何でしょう?」

「ベッドが一つしかないんですけど……」

恐る恐る尋ねてみたがリイゼンは笑顔のまま答える。

「え？ 何か問題ありますか？ 夫婦なんですし、お二人で寝るんでしょ？」

「……っ！？」

そ、そのものなのかな

「では、私は失礼しますね」

リイゼンはぺこりと頭を下げると部屋を出て行ってしまっ。チャウランはその場に立ち尽くした。

ま、まあ、人がベッドに入っていればいきなり入ってくる人もないですよ？ ベッド独り占め！

そう思い、ベッドに潜った。

大きな窓から差し込んだ光を顔に浴びてチャウランは目を覚ました。

あまりの眩しさにじわりと涙が目に滲む。

チャウランは目をこすりながら身体を起こした。

それとなく、視線を落とす。

隣ではシーゼンが眠っていた。

「女の子が寝てるここに入って来ないでください……」

「何様だ君は」

「すみません……」

チャウランはぺこりと頭を下げた。

「シーゼンは、何で私に嫁に来て……。野菜が食べたいなら、私の家からまとめ買いすればいい話なんじゃ……」

シーゼンはむっとした表情を浮かべる。

「俺が、野菜目当てでどんな女でも結婚できてると思ってるのか」「思ってます……」

ゴツンと頭を叩かれたチャウランは頭を抱えてうずくまった。

「ごめんなさい、思ってます……」

「まあ、俺は一応皇子だからな。そんな不純な理由で結婚相手を決めたりはしないし、例え胸が小さくても受け入れるし」

「私の胸、小さいですか……」

「ん、小さい」

「うー……」

「泣くな」

「う、うー……」

野菜が二個

無駄に広くいくつもの窓があるから太陽の光が部屋中を照らし出しており、明かりなど必要のないほどである。

中央のテーブルには白い布がかけられ、大きな鳥の丸焼きだとか野菜スープだとかふかふかしたパンだったり、数え切れないほどの豪華な料理の数々が並んでいた。

チャウランとシーゼンはテーブルを囲んで朝食をとっていた。

しかし、シーゼンはパンを口に運ぶなかチャウランは目をこすりながら泣きじゃくっていた。

ポロポロと涙がテーブルに落ち、白い布にシミができる。

「うっ……」

「君はいつまで泣いているつもりなんだ？」

不満そうな表情でパンを皿に置き、言葉を発するシーゼン。

「うー……だって、胸が小さいって」

胸が小さいと言われた程度で泣くものは滅多にいないだろう。

そもそも、その程度で泣く理由が彼には分からなかった。

シーゼンは呆れながら呟く。

「では、巨乳と言えば泣かないのか？」

チャウランはいまだに泣きじゃくりながらこくりと頷いた。

それを確認したシーゼンはサラダが盛られた皿を取り、立ち上がるとチャウランの顔に押し付けた。

「ふっつ！」

いきなりの衝撃に驚いたチャウランは椅子から転落して頭を床に打ち付けてうずくまった。

皿に盛られていたサラダが床に落ちる。

「甘ったれるな、それぐらいで泣くとは何事だ。飯ぐらいきちんと食べる。作ってくれた人に対して失礼に値する」

「う……サラダを顔に押し付けて食べ物を粗末にするのは失礼じゃないんですか……」

シーゼンはしばらく沈黙し、コホンと咳払いをした。

「わざとではないと言っ言葉があつてだな」

「わざとでしたよね!？」

「まあ、その、何だ。さっさと食べなさい」

「床で打った頭が痛いです」

「口にパンを詰め込んでやろうか？」

「食べます……」

よろよろと立ち上がった彼女は椅子に座るとスプーンを手に取ってスープをすくった。

スープを口に運ぶと野菜の味が口のなかに広がり、身体が温かくなってきた。

パンは予想通りふわふわで少し甘かった。

「あと、これだが……食べてみる」

シーゼンに差し出されたのはポテトサラダだった。

さっきの普通のサラダは散ってしまったから食べることはできな

い。
チャウランはスプーンでサラダをすくうと口のなかに入れて、もぐもぐと噛んだ。

「ん？ これは……」

「気付いたか？」

「うん。ポココが入ってます」

どうやらシーゼンは数日前にチャウランから回収したポココを早速料理に使わせたらしい。

「うまいか？」

「生よりうまいです」

「だろうな」

シーゼンはにこりと笑った。

チャウランも自分でポココを料理したことは何度もあったが、家に十分な調理器具や材料がなかったため、そのまま焼いたりスープに入れたりというシンプルなものばかりだった。

「でも、これはポココのおかげですよね！」

「自身過剰だな」

チャウランが食事を終わるとシーゼンが口を開いた。

「今から案内したい所がある。とりあえず着替えてもらおうか」

「着替えるって何に？」

思えばチャウランは着替えとなるものを何一つ持って来ていなかった。

それどころか、手ぶらで来ていた。

何か服を買うにしてもお金を持っていないし、どうにもできない。チャウランはシーゼンの顔を伺いながら恐る恐る口を開く。

「あの、服持って来てなくて……お金もなくて……」

「心配する必要はない。そのクローゼットに大量に入ってるから好きなのを着ればいい」

ひとまず服を着替えてチャウランはシーゼンの後に続いて廊下を歩いていた。

無駄に長くてむしろ疲れてしまうような廊下には赤い絨毯が敷かれ、目も疲れてしまいそうだった。

廊下を歩き続けていると、廊下ですれ違う侍女達は全員道を開けていた。

しばらく歩くと行き止まりに辿り着いた。

そこには下に下りるための階段がある。

「う……階段も長そうだなあ……」

息を切らしながらチャウランが呟くとシーゼンは振り向いて、むっとした表情で尋ねる。

「何か言ったか？」

「い、いえ、何でもありません……」

「あ、そのな、敬語じゃなくていい」

「え？ な、なぜでございましょうか……？」

チャウランが目丸くしてオロオロしていると彼は苦笑いを浮かべて肩を竦めた。

「主と従者というわけでもないし、何せ一応夫婦だからな。差があるのはおかしいだろう」

「りよ、了解」

チャウランはあせあせと敬礼のポーズを取ってみた。

「さて、行くか」

「何も突っ込まないのだね……」

思った通り、階段もかなり長かった。

老人がこの階段を使ったら途中で転落してしまいそんな気がしてならなかった。

ようやく辿り着くと薄暗い広間だった。

多くのランプ照らされており、特に不便は感じなかった。

その広さにも驚いたが畑があることが何より驚くことだった。

きれいに耕された畑が十個程度並んでおり、近くに置かれた箱のなかには必要な水や土のストーンも用意されている。

「おお……これは、広すぎじゃないかあ……」

「全部使う必要はない。まあ、思う存分育てるといい。できるか？」

「もちろん！ ……あ」

チャウランは困ったような顔になった。

「どうした？」

その様子に気付いたシーゼンは不思議そうに彼女の顔を覗き込んだ。

「……その、種がないというか……」

「じょーじょーじょーと口ごもる彼女の額をパチンと叩き、彼は箱を指差す。

「箱のなかをよく見ろ」

言われた通りにしゃがみ込んで箱のなかを覗き込むとポココの種と他の種も用意されていた。

「これは……」

「君の家からもらってきた」

「な、なるほどー！」

しかし、ここに来ても農業……

「燃える……」

「野菜を燃やさないようにな」

「分かってる」

「では、いつでも好きなだけここで農業をやるといい」

「了解」

「今からやるのか？」

そう聞かれ、迷ったが頷いた。

「ん、じゃあ、俺は上でやることがあるからおいとまする。何かあったらそのエストレッタに尋ねるといい」

シーゼンが指差した方向に視線を移すと少女がいた。少し小柄な、青いツインテールでメイド服を着た少女である。どういうわけか、チャウランは今まで彼女の存在に気付かなかつた。

気配を殺してたということ……！

「エストレッタ……。変わった名前だね？」

「まあ、エストは他の国から留学してきてるからな」

「留学。つまりお金持ちか。でも、何で侍女に……」

「貴族が留学して使用人をやるのは珍しいことじゃない。まあ、とにかく俺は上に戻る」

「了解」

シーゼンが姿を消すと広間には沈黙が訪れた。

ゆるやかな風の音だけが聞こえる。

沈黙に耐えかねてチャウランは笑顔を浮かべつつ、口を開いた。

「よ、よろしく。エストレッタさん」

「むー……エストでいいの」

「じゃあ、エスト」

「むん」

「……………」

「そっちはチャウランでいいの？ 呼び捨てでいいの？」

「いいのです」

「チャウランなの」

「じゃ、じゃあ、早速」

チャウランは土のストーンを手を取った。

ギュツと握り締めるとストーンが光りだし、茶色いスコップが目
の前に現れた。

それを握るとチャウランは自分の頬をパチンと叩いた。

「よし！」

「失敗しちゃダメなの」

「しないよ、多分……」

「多分は、めっなのー」

「りよ、了解！」

野菜が三個

スコップを握ったチャウランは種を植えるために地面を掘り始める。

さくさくという音が響き、地面に穴が開いていく。

ちなみにチャウランの使っているスコップはストーンの力により生成されたもので、普通のスコップとは違って硬い地面でも簡単に掘り返すことができる上まとめて一列繋げて掘る場合はこのスコップの《マジック》を使うことで一瞬で一列掘れてしまう。

しばらく掘り続けていると、エストが声をかけてくる。

「まだなの？」

無表情で言葉を発する。

エストはどうやら、思っていることは顔に出さないらしい。何を考えているのか分かりにくい。

「まだ」

「むー……」

エストは少し頬を膨らませる。

そして、箱のなかから土のストーンを取り出す。

ギュッとストーンを握ると淡い光が溢れ出し、スコップが出現する。

それを握ったエストはチャウランの隣にしゃがみ込んだ。

「じゃあ、私も手伝う」

「ホントに？　ありがとう」

チャウランはにつこりと笑った。

エストは無表情のまま地面を掘り始める。

さくさくと掘り進め、あっという間に終わってしまった。

チャウランはぐるりと畑を見回す。

すっかり穴だらけになっていて、準備は完璧だった。

「すごいなー。エストちゃんって仕事早いよね？ やったことあるのかな？」

「む、あるの。ここでは花を植える仕事もやらされてるの」「な、なるほど」

確かにこの王宮の中庭には、大量の花が咲き誇る花畑があった。あれだけ巨大な花畑の手入れでもしていれば、穴を掘るのが速くても何の不思議もない。

とりあえずチャウランは次の作業に移るために箱からポココの種を取り出した。

「と、とりあえず今日はこれだけ植えて……！」

「休むのですなー」

「そ、その通り」

エストに言われて素直に頷いた。

まだここに慣れてないから休む

ポココの種を半分エストに渡すと掘った穴に入れて土を被せる。その作業が終了すると次に水のストーンをギュツと握り締めた。出てきたのは可愛らしいデザインのジョーロだった。

チャウランは畑の中心に立ち、そのジョーロを振り回した。

畑全体に水が降り注ぐ。

「これで、よし」

「もう終わり？」

「終わり」

スコップとジョーロをストーンに戻し、片付けを済ませると階段を上がり始める。

部屋に戻ると椅子に腰掛け、本を読んでいるシーゼンの姿があった。

彼はチャウランに気づくと顔を上げた。

特に変わった様子もなく口を開く。

「終わったのか？」

「とりあえず。用って本を読むことだったとか？」

「まあ、勉強は必要だからな」

「文字とか読めるんだ……」

「君は読めないらしいな」

「平民は勉強なんかしないし、文字が読めるわけない」

「勉強しなくても生きていけるからな」
「うん、でも」

チャウランは頷き、口を開く。
じつとシーゼンの持つている本を見つめていた。

「本とか読んでみたいと思うこともある。どんな物語があるのか気になるし」

「ん、では呼んでみるか」

「了解……と言いたいけど文字が読めないって」

「そうだったな」

シーゼンは本を引き出しのなかにしまう。

そして沈黙が流れる。

どちらもその場を動かめまま、窓から入ってくる風の音だけが部屋のなかに響く。

沈黙に耐え切れず、チャウランは気になっていたことを尋ねる。

「シーゼンは……何で私を」

「君もなぜ男女が結婚するかぐらいは知っているだろう」

淡々と告げるシーゼンに対して、チャウランは顔を赤く染めながら「ご」によご「によ」と口ごもる。

「それは、その……あれ。子作りして子孫を残すため……だったっけ……」

シーゼンはため息をついた。

「俺がしているのは、その話じゃない。なかには子供を作らぬ者も

いるだろう。なぜ、誰かと結婚しようと思つのか」

「だから、それが聞きたいんだって。普通は好きな相手と結婚するし、何で私と」

「君は俺を信用してないな？」

「信用？」

チャウランは怪訝そうに眉をひそめた。

「俺が君のことを好きではないと言いたいんだろっ？」

「んーと、そうなるかな」

「黙れ、バカが」

「バカって……」

反論しようとしたところで、不意に引き寄せられ口づけをされた。

「……っ!？」

チャウランは目を丸くした。

「どう愛情表現をやれば分かるんだ、君は」

「う、あう……」

お互いに顔を赤くしながら沈黙。

そして、少したつとチャウランは泣き始める。

「うー……」

「まさか……そんなに嫌だったのか……?」

「バ、バカ……そういわけじゃ……」

チャウランは「じし」と目をこすながら言っ。

「やはり、君は何も知らないな」

「何を……」

「俺は以前から君の存在を知っていたし、それに……」

「それに？」

「君はまだ俺のことも好きではないだろうが」

「嫌いというわけでも……」

嫌いだったら、親がすすめてくれても絶対に王宮には来なかっただろう。

ここに来たのは、何か自分の道が開けるのだと思ってのことだった。

シーゼンは真剣な表情でチャウランの姿を見据えながら再度口を開く。

「まだ遅くはない。これからでも、充分仲良くはなれるだろう」

「好きになれってことかな。りよ、了解！」

チャウランは敬礼のポーズをとってみた。
すると彼は苦笑いを浮かべて肩をすくめた。

「了解とは、嫁が言うセリフではないな。では、俺に尽くしてくれ
るか？」

「それはちよつと……」

そう言っていると頬をつねられた。

チャウランは涙目になりつつ、返事をする。

「りよ、りよーかい」

「よろしい。そうだな、俺はその君の了解という言葉が好きだ」

「了解……」

「あと、最後に一つ、約束してほしい」

ぎゅっと抱きしめられ、チャウランは目の前がぐるぐるした。

今にも気絶してしまいそうであーだのきゅーだの呻き声を上げた。

「俺より先にいなくならないように。これだけは守ってくれ」

「りよ、りよーかい……」

先に死ぬなっということかな

「それで、その……」

「ん？」

「私は、暗殺されたりなんてことは……」

「ないから安心しろ。不審者が侵入することできないはずだ、多分」

「多分！？」

「じゃ、じゃあ、私は野菜しか作れないから何かあっても何もできないから、何かあったら……ま、ま、ま、まままもっ……守ってくれると嬉しいというか……べ、べつに……守られなくても、安全に生活さえできれば」

パニック状態で喋るチャウランにシーズンが制止をかける。

彼女の頭にチョップをお見舞いして黙らせた。

ぐわんぐわんするチャウランに一言。

「とりあえず、落ち着け」

「りよ、りよーかい」

「ま、まあ、どうしても言うなら守ってやらないこともないがな」

「べ、べつに守ってほしいってわけじゃ……」

「……………」
「……………」

お腹が減ったチャウランは何かもらおうと厨房に向っていた。

広い廊下を歩き続け、厨房に辿り着く前に倒れてしまいそうな気がしていた。

しかし、気力を振り絞って歩き続けていた。

何を食べさせてもらおうかと考えていると自然と楽しい気分になる。

ふと、パタパタと足音が聞こえた。

誰か来るのかと前方を見ると、白いドレスを着た異国人と思われる少女だった。

栗色の長いふんわりとした髪を腰まで垂らし、一部分を後ろで束ねている。

なぜか彼女は止まる気配がなく、避けきれずに思い切りぶつかってしまった。

二人は床にしりもちをついた。

「うー……………」

「う、ごめんなさい」

「ん？」

見覚えのない人物だったにで、チャウランは首を傾げた。

「あ、あなたはもしかやチャウランさんでは？」

「合ってるかな」

「シーゼン様のお嫁さんですよね！ あ、私はローゼリアと申しま
す」

「ローゼリア……。ところで、何で走ってたの？」

「すみません、お恥ずかしいところを……。実は、セージル様を探
していたのです」

「セージル？」

「あれ？ まだ存じませんか？ シーゼン様の弟君ですよ」

「弟……。ローゼリアは……」

見たところ侍女には見えない。

使用人以外で皇子を探す人物が存在するだろうか。

「あ、私ですか」

ローゼリアはにっこりと微笑んだ。

「私はセージル様の婚約者です」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6950z/>

王宮で農業生活

2011年12月24日10時46分発行